

御辱

スライ
パンティヤク

立ち読み版

小説 大熊狸喜

挿絵 池田靖宏



プロローグ 狙われた女格闘家たち

第一章 全裸身体検査

第二章 裸の荒野

第三章 ペナルティー

第四章 孕ませダービー

エピローグ いつかに向かつて

006

018

063

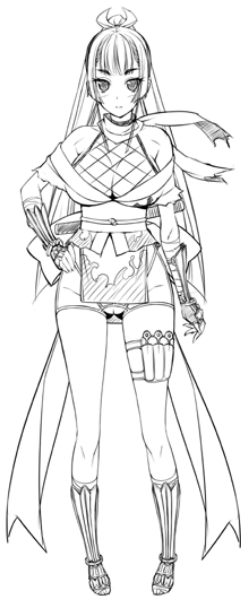
128

200

259

登場人物紹介

Characters



く おん し か れん
久遠寺火憐

代々続く忍者の家系「久遠寺流忍術」の第十七代頭目。優れた才能とカリスマ性を持ち、忍者の仕事をするだけでなく、格闘大会に出場し無双の活躍を見せている。



と だろ き きり か
轟霧華

幼い頃から格闘技を独学で習得し、公式・非公式を問わず、格闘試合で一度も負けたことのない天才女子校生。気を探って敵を攻撃する技も身に着けている。

ブラック・メーカー

火憐たちを拉致した謎の組織。世界の富豪たちが秘密裏に楽しむギャンブル「The Fox Hunt」を主催している。

くろ しゅういちごう
黒の十一号

「The Fox Hunt」のゲームマスターを務める仮面の男。丁寧な口調で残酷なゲームの説明を楽しそうにする。

にこやかに告げる仮面の男に、霧華はイライラを隠さずハッキリ言う。

「天気のお知らせなんていらぬよっ！ オジサンがあたしたちを解放してくれたら、好きだけ見れるんだからっ！」

「まあ、そう焦らずとも……青い空は、後でたっぷりとお楽しみ頂けますので」

ククつと笑った男は、更に説明を続けた。

「島の直径は、ほぼ五キロほど。島どころか周囲の海二十キロには、あなた方と我々、そして関係者以外の、誰もおりません」

（つまり、私たちは完全な監禁状態……組織は周囲の海も含めて所有している、という事……！）

身体が痺れる中でも、くノ一である火憐は意識しなくても、できるだけの情報を集める。これは忍としての習慣だ。

焦燥を隠しながら、仮面の男を見据える二人。

一方的に招致した格闘女性たちに向かって、黒の十一号が、一際抑揚する声で告げた。

「さて、天才くノ一の久遠寺火憐様。百年に一人の超逸材と謳われる轟霧華様。本日お二人をご招待いたしましたのは、ぜひ我らのゲームにご参加をお願いしたいからです！」

まるでオペラ歌手のように、両腕を広げて優雅にクルリと一回転した。

「……ゲーム……ですって？」

「はい。そのゲームとは、『The Fox Hunt』！」

言い終えると同時に、スポットライトが火憐たちを照らす。どこからか、オーケストラの演奏までが盛大に響き渡り、無数の拍手が沸き起こる。

眩しい天井を見上げたら、大小無数のモニターが下りてきた。二人を遠巻きにするように下ろされたモニター群は、頭上三メートルほどの高さで停止。

「何なのさ……あっ！」

全てのモニターには、うつすらと顔の見えない人影が映されていた。

一人だつたり複数人だつたり。しかし僅かに見える服装から、みな裕福な男性や女性だとわかる。拍手の主は、モニター内の人物たちだつた。

暗くて顔は見えないものの、口元は楽しそうに微笑んでいる。

驚く二人に男は説明を続けた。

「ゲームのルールは簡単至極。これから三日間、七十二時間にわたって、いわゆる鬼ごっこをして頂きます」

「鬼ごっこお？ いい年した大人のクセにっ！」

怒りの感情で、ちよつと笑って告げる格闘少女。

「だけど火憐と同じく、こんな連中の言う鬼ごっこが普通でない事は、容易に想像できる。

「はい。仰る通り……フォックス・ハントは大人の鬼ごっこでございます。フォックスとは、すなわちお二方。そして鬼、つまりハンターとは……」

言葉を溜められると、不安で心臓がドキドキと高鳴った。

二人の感情を読み取るように、数秒焦らした黒の十一号が、大々的に明かす。

「麗しきお二方の肉体を狙う、レイパー。すなわち強姦魔の、しかも大集団でございます」

「なっ——っ!？」

男の言葉に、耳を疑う。同時に、モニター内の観客たちから再び、盛大な拍手が送られた。

仮面の男は、モニターに向かって頭を垂れて、感極まっている芝居を見せる。

「おお……本日のおお客様方も、極上のフォックスにご満足のご様子。わたくしもセツティングのしがいがあります。ゲームマスター冥利に尽きるといふもの。クッククク……」

冷笑的な男の言葉に、二人の女の本能が、ゾッと怖^{おび}けた。

現在の状況を、火憐は冷静に努めて整理する。

（……っ、つまり私たちはこの島で、卑劣な男たちから逃げ回るゲームをさせられる、という事……!?)

新たに大きなモニターが下りてくると、上空から見たような島のシルエットが映し出される。鬼ごっこをさせられる、バトルフィールドだ。

円形に近い島の中央部分では、赤い光点が二つ点滅している。これは火憐と霧華だとい

う。
「ゲーム開始と同時に、お二人には脱出口へと向かって頂きます。ゴールである脱出口は、島の周囲を取り囲む高い壁に、六カ所ございます」

説明に従って、島の海岸線を取り囲むように白い光のラインが走り、そして白線内に、六つの緑色の光点が出現。

白いラインが壁であり、緑の光が脱出口だ。

脱出口は、島を囲むサークルに対し、ほぼ均等に六カ所存在している。

スタート地点からゴールの壁までは、大体みな同じくらいの距離だ。

「勝利条件は、ただ一つ。七十二時間以内にこれら脱出口の一つに到着し、見事に脱出される事……のみでございます」

逃走の過程で出会ったハンターは、好きなかだけ倒してもいいらしい。

「じゃあ逆に、脱出より先に全員やつつけちゃってもいいって事でしょう。あたしと火憐さん相手に、随分簡単な鬼ごっこじゃないっ!」

不埒なゲームに焦りながらも、霧華は余裕の笑みを忘れない。

「はい。お二人にとっては、実にイージーなゲームでございます。しかも、見事ゲームの勝者となられたあかつきには……日本円にして賞金十億が授与される次第でございます」

「じゅじゅっ、十億……っ!?!」

実家の経済状況を思い出したのだろう。驚きながらも、格闘少女の頬がバツと華やいだ。

「お二人が共に勝者となられれば、賞金総額は二十億。更にハンターを一人撃退につき、百万の賞金が加算されます」

それら全てを格闘の技でノックアウトする事も許される、という事。しかし追いかけて

くるハンターは、全部で二百四十人。

その人数に、火憐はゾツとする。

(に：二百四十人……っ！)

対してコレまでの格闘人生で一切の負けを知らない霧華は「二人合わせて賞金は二十二億四千万円」とか、震える指で計算していた。

続く男の言葉に、火憐も霧華も注目する。

「ただし、例えば全てのハンターを倒しても時間内の脱出がかなわなかった……などの場合、その時点で、フィールドに残されていたフォックスは敗者となります」

つまり、何人ハンターを倒しても七十二時間以内に脱出ができなければ敗者という事だ。そして男は、更におぞましい事を告げてきた。

「敗者となられたフォックスのお身体、その他全ては……我ら組織の所有物、とさせて頂きます」

「……っ!!」

「な、何言ってるのっ!!」

強姦魔たちに女を追わせるゲームなんて、まるで狂気としか思えない。万が一にも捕まっってしまったら、きつと酷い陵辱に晒されてしまうだろう。

そのうえ、敗北したら一方的に組織の所有物にされてしまうという。いつたい——。

(この男たちは何なの、正気なの…?!)

考えただけで、ゾッとさせられた。

そんな二人をフツと笑い、仮面の男は、フォックスたちを焦燥させる言葉を続ける。

「二百四十人のハンターたちも……その辺にいるような、在り来たりな輩ではございませ
ん」

彼らにも、壮絶なペナルティーがあるらしい。

「七十二時間以内にフォックスと接触できなかったハンター……その代償は、彼ら自身の
命！」

「命……まさか…っ！」

一瞬、我が耳を疑った。

「キツネ狩りの役に立たない猟犬など、いったいなんの役に立ちましょうか。それはそれは、必死になってエモノを追いかける事でしょう」

仮面の男は楽しそうに、オペラを歌うように、残酷な話を続けている。

「もとより彼らは、社会の底辺から更に転落してきた人生の敗北者。ここですら役に立たないのであれば、生きていたって、なんの得にもなりません。ここで排除して差し上げる事が、まさに社会へのご奉仕というもの」

男の言葉に、色々と把握しきれないらしい年若い霧華は、啞然としている。

(こ、この男たちは……本気で……!)

火憐も驚愕する。

「それだけではございません。フォックスを捕らえ犯したハンターは、全ての社会的負債からの解放。と同時に、陵辱一回につき百万円の賞金も用意されております」

つまり強姦魔たちは、火憐たちを捕らえられなければ死刑。

捕らえて強姦したら、全ての借金などの免除。更に一回の強姦中出しにつき、賞金百万円だという。

富豪たちが、面白げに拍手を送っていた。

あまりに異常な事態に、格闘少女は怒りを爆発させる。

「なっ——オジサンたち何言ってるのっ、頭がヘンなんじゃないのっ!! 第一、ダメだつたら死刑とかつて……そんな事できるわけっ——」

反抗する霧華は、しかし言葉を失った。

モニターの人々の優雅な笑いと拍手に、常軌を逸した、言葉にならない実感を、得てしまったのだ。

そんな人々を、注意深く観察する火憐。

穏やかだけど冷徹さを隠さない雰囲気。それなりに上品な衣装。チラと見える装飾品。

更に、背後に僅かだけ見える、豪華な絵画や造りの立派な室内。

手にしているグラスも執事の注ぐワインも、どれも銘柄としては世界でも指折りの逸品。

(顔は見えないけれど……かなりの富豪たち……)

それらによつて、くノ一の乙女は僅かだけど、確信の持てる情報が得られた。

ブラック・メーカーは、モニター内の富豪たちを相手に、こんな狂ったゲームを開催して利益を得ているのだろう。

ハンターと呼ばれる人間たちは、社会的な敗者とおぼしき人たちだから、組織の背後には巨大な金融グループも関わっていると考えられる。

(とはいえ、私たちも知らない組織……)

自慢ではないが、久遠寺流は諜報機関としては、世界でもトップスリーに入るほど優秀だ。現代社会で、たとえ超大国がバックにいたとしても、その存在を完全に隠すなんて不可能。

(活動自体は異常でも、組織の規模そのものは、それほど大きくない……)

反面、現時点でわかった事はそれだけでも言えた。

この島全体が組織の所有だったり、こんな広い地下空間を建造している事実から考えると、できたばかりの組織だとは考えにくい。

しかし古くからの組織であれば、里の情報網になんらかの形で引っかかっているはずだ。(何にしても、まだ情報が少ないっ——)

そんな考察が、男たちの掌で唐突に遮断された。

「っ——っな、何ですの……っ！」

屈強な黒服の男たちに左右から挟まれて、両腕を取られる。ガスによつて全身に力の入

らない火憐と霧華は、足が浮くほどの高さにまで持ち上げられた。

二人の抵抗を全く無視して、黒仮面が富豪たちに何やら説明を始める。

「さて、これから皆様にはエモノであるフォックスの状態を確かめて頂きます。一切の不審もありませんよう、皆様の目の前でチェックを始めさせて頂きます」

恭しい礼が捧げられると、火憐たちに対する恥辱の身体検査が始められた。

大の字姿で拘束された二人のエモノに、アームで操られた数台の小型カメラが接近。

焦燥する美顔や極端なローアングルから接写されながら、男たちの手で装飾品を奪われ始めた。

「なっ、何するのさっ！」

霧華の格闘用グローブがスルリと脱がされ、火憐のブーツがアーマーごと脱衣させられる。

「ふ、服が…っ！」

更に、くノ一衣装の帯が解かれ、ブレザーやオーバーニーやリボンも、強制的に剥がされてしまう。

（このまま、裸にっ——）

そんな焦燥に頬が上気し、セクシーに曇る美顔。

小型カメラが、まるで欲情する生物の如く、ズームアップでレンズを蠢^{うごめ}かす。

汗浮かせる二人の顔は、富豪たちにだけでなく、目の前のモニターにも大写しにされて

いた。

「おっ、おやめなさい……っ！」

忍衣装のボトムを奪われると、下着が露出。

くノ一の下着は、赤くて細い、小さなふんどし型の布だった。

細い紐が骨盤の上にムッチリと食い込み、指三本分ほどの幅しかない生地が、ヒップから恥丘までの柔肉を包んでいる。

後ろは紐Tで前はTフロントという、下着としても大胆な形だった。ごく薄い生地だからか、処女の割れ目もクッキリと浮き立たせている。

「これはこれは……ミス火憐は、積極的な女性ですね。クックック」

「うう……！」

女性の下半身の、白い肌の大半を隠していない、大胆なふんどしショーツ。

珍しいのか、黒の十一号だけでなく、脱衣させる男たちもニヤニヤと舐め回すように視姦してきた。

見知らぬ男たちにジロジロ見られると、いつも身に着けている正式な忍衣装なのに、恥ずかしさで全身が熱くなってゆく。

アーム操作のカメラが真下から接近してくると、大の字開脚のショーツヒップを股下で前後に往復されて、接写される。

仮面の男たちだけでなく、モニターの富豪たちからも、嘲笑に似た笑いが聞こえた。

男の掌が、更に上着へと伸びてくる。

「なっ——ああっ！」

帯を解かれた衣装と鎖帷子が奪われると、大きな乳房が、タツプンと露出させられた。九十六センチの双乳が、ライトに照らされて艶を見せる。羞恥に逸らされる美顔に比べ、タツプリと大きな火憐の乳房。

柔らかく弾みを見せる柔脂肪は、重力に負けない若さで丸い形を保っている。

白い球体の先端では、小さくて桃色の媚突が、ツンと斜め前に突き出されていた。

「皆様ご覧下さい。天下のくノ一、火憐嬢のバストが、皆様だけに初披露されました」

紹介の言葉で、急速に視線が集まってくる。

人々の目を意識してしまうと、キュ……と硬化を見せる桃色の乳首。周りの乳輪部分も微細な粒を浮かせて、望まぬ女体の高揚をアピールしてしまう。

富豪たちからは、見事な巨乳に感心する、上から目線の拍手が沸いた。

首を隠すマフラーまで奪われると、小顔から細い首、タツプリの双乳と引き締まったウエストまでの扇情的なレディースラインが、露わにされる。

乳房を支えるには不安を覚えそうなほど細い背中や、引き締まったウエスト、柔らかく広がるヒップの曲線が、特に男たちの視線を集めてしまう。

「さて、いよいよ誰も見た事のない、火憐嬢の秘処中の秘処を、ご覧下さい」

そう告げられると同時に、ショーツの細紐が男の指で掴まれる。



「いいエロ顔だあ、もつと狂わせてやるぜ」

牡の宣言をされると、勃起突きの速度が急速に上げられた。

——っツぷづぷず又ゆりユっづプユっ、又ぷづぷるぷッヅちユぬルづゅっ！

「あひっ、ひはあああっ——っ強くひちや、つよくっ、つよくてすごひいいいっ——っ
あんあんあんああああっ——っ！」

乙女の軽い身体が、男の腕力と腰打ちだけで、強く激しく上下動をさせられる。

丸い裸尻は肌曲線に沿って汗をツルリと流し、脱力したヒザはプラプラと頼りなく揺れている。子宮から背筋、脳までが勃起の熱と太さで灼かれてゆくと、力のない上半身は震えながら背筋を伸ばしていた。

胸が反らされると二つの汗巨乳が天を向いて、硬化した媚突を男たちに晒しながら、激しく楕円に弾んで魅せる。

背中で縛られた両腕は弱々しく拳を握って性感に耐え、初めて男性を教えられる肌は上気して、紅葉に染まって恥汗を流す。

入り口から子宮壁までを激しく肉突きされ続けると、膣の粘膜が更にキツく愛しく、強姦魔を抱き締めて甘くオネダリ。

「わたひっ、わたひラメへっ——おかされてっ——ああああっ——ごめん、なさいっ！」
里の人たちや霧華の顔が深く過って、そして性感に押しつぶされてゆく。胎内を連打される犯されくノ一は、もう知らない絶頂以外、何も求められなくされていた。

激しい鼓動に合わせて、乙女の膣壁がリズムカルに強姦魔を締めつける。

女の絶頂が目の前だと悟った二十八番は、くノ一の耳に絶望の一言を告げた。

「お前の子宮に、オレの精液をタツプリと溢れるほど、中出ししてくれてやるぜええっ！」

「っ子宮うっ、中出しっ——っ中わはっ、やめてっ——くらさひいいっ！」

一族の頭目乙女として守るべき子宮内に、強姦魔の子種を射精されてしまう。

もし妊娠させられてしまったら——。

恐怖の言葉と想像に、押しつぶされてゆく理性は恐怖して混乱。

反して、肉体は女性本能で熱望を口にした。

「なっ、中ラシイヤっ——っイイっ——中に、カレンの中にいっ——っラしてくらさひいいっ！」

女の肉体に、自尊心が殺されてゆく。

犯されて、身籠もらされる——。

そんな破滅さえも、火憐には強姦魔によって与えられる、絶対的で甘美な自己破壊の誘惑。もうくノ一の頭目には、強姦巨人の中出しを拒絶する事など、考える事すらできなかつた。

心臓が限界まで高鳴って、目の前の景色が虹色に消滅してゆく。絶頂寸前まで突き上げられた女体が、陵辱男の勃起を抱き締め、最後のお慈悲を纏る。

胎内を占領する汚肉棒が、一回り熱と太さと堅さを増した。

一際ギリギリまで抜いたと同時に、力いっぱい突き込む強姦魔が告げる。

「いきながら吞ませてやるよっ、ムンンっ！」

——つつづぷんつつっ!!

「っ——っくはっ——っひあああああっっ!!」

肉埋めされながら子宮壁をアッパ—された瞬間、火憐は生まれて初めて、男性器での絶頂を味わわされていた。

「いいっ——わたしっ、いきますううっ——おかされてっ、あああっ——おかれてっ、イってしまふうううああああああああああっっ!!」

全身の肌が力んで、サアツと薄い桃色に染まる。絶頂の証を晒しながら、背筋が反れて全身が痙攣をし、突き出された乳房がブルルツと震えた。

ペニス全体を吞まされる膈壁が、絶頂に震えて肉棒を粘膜拘束。

取り囲む強姦魔たちやモニターに蕩ける美顔を晒しながら、くノ一乙女の瞳からは、散らされた希望の光と涙が、ポタポタとこぼれ落ちた。

恥辱に染められたくノ一。しかし二十八番によつて、更なる性地獄へと突き墮とされる。「たっぷり吞めやっ！」

強姦魔の射精。胎内で勃起が肉膨張して、子種の粘液が放出される。

——っビュウウウウウウウウウウツツ、ドブルリユツ、ビュルルルルルルルルツツ!!

肉突きよりも強い放精。

密着した子宮壁を突き放すような勢いに、絶頂させられた女体は、更に高みへと突き上げられた。

「またイツ——つイツちゃふうつ——はひ、ひいいいつ——つわたひつ、いくのれすふうつ!!」

膣粘膜が更に痙攣しながら、男性器を抱き締めて射精への感謝を伝える。

頭目の守られるべき子宮には、穢れた強姦魔の強い子種粘液が、タツプリと吐き出されてしまった。

まるで粘着ゼリーの如く強い粘度の精汚液に、火憐は子宮粘膜の隅々まで粘りつかれて、更に吐き出されて液詰め陵辱。肉棒を抱き締めて密着する膣孔からは、蜜と一緒に白い樹液が、膣壁を穢しながらこぼれて溢れた。

「ああ……はひ……はああ……はああ……」

強姦が終わっても、絶頂から下りられない乙女。

男を教えられた女体はいまだ淫熱に悶え、突き込まれたままの子宮は、すぐに新たな飢餓感で責められていた。

最後の一滴まで吐ききった二十八番は、裸尻を持ち上げて火憐から抜くと、楽しんだ女体をそのまま放置。

「そーいや、お前誰だっけか？ クフックク……まあいいや、身体はよかつたぜえ。お前

を犯して中出しを楽しんで、オレは地獄から無事生還だあ」

「あ……うあん……」

地面に転がされ、残酷な言葉で罵られる。

悦楽を彷徨さまよわされながら、火憐の無意識、自尊心の柱は、更に粉々に踏み砕かれていった。

「お前は処女も人生も奪われて、一生この地獄で犯され続ける。女なんぞ所詮、こんなモンだあ、グフツハハハハハッ！」

高笑いを残して、火憐の処女を奪った強姦巨人は去っていく。

わたしは、負けた――。

天才くノ一と言われた自分すら、かなわない相手。

そんな男がいた。ただそれだけが、冷たい事実。

そして残された裸身のフォックスは、その女体を取り囲む陵辱魔たちに掴み上げられた。男たちはみな目を血走らせ、火憐の美脚を大きく開き、猛り狂った勃起を我先にと突き

つけてくる。

「今度はオレえっ！ マンコに中出しして、オレもこの地獄から脱出だあっ！」

「ぼ、僕も犯して、賞金もらってシャバだっ！」

やせ細った若者を押しつけた小太り男が、ムチムチに張った乙女の腿を両脇に抱いて、ツプツと一気に姦入してきた。

再び子宮口を突破された途端、仰向けで放心していた女体が、一瞬で性感覚醒させられる。

「はひっ——つまたあつ、犯されえええつ！」

飢餓感にまみれる子宮がゴオツと燃やされ、初体験よりも少しだけ細いペニスをキツく抱擁。達したばかりの白い肌が、再び官能の霧汗をシットリと纏った。

火憐を犯した男は、久々に味わう、そして絶品な女体を征服した事実には、牡の本能で歓喜する。

「ムヒョウツ！ マンコだマンコだあつ！」

無数の粒粘膜が愛しく締めつける、乙女の腔壁。

小太りの男は根元まで完全強姦をすると、全力で陵辱抽送を開始した。

——つづちユぶりユツブヌるチゅっ、ドぶづぶづぶツツ！

ケダモノの欲求を一方的に吐き出す為だけの、勃起詰め。女をただの肉道具として扱っている、性行為とも呼べない乱暴。

なのに犯される女体は、堅くて熱い男性器で満たされただけで、アツという間に更なる悦楽へと叩き上げられてしまっていた。

「いいいいいい——つ子宮っ、しきゅううううっ、ズンズンんんんっ！」

腰を引かれるだけで耐えられない空疎感に狂わされて、一突きされるごとに肉充の幸福感に躰けられてゆく。

目の前で展開される再強姦劇に、残る男たちも加わってきた。

「ぼ、僕はまず、尻を犯すっ！」

正常位で抽送されながら女体を起こされて、堅くて先細りだけど長いペニスを、いまだ処女の菊肛に背後から肉注入される。

——っぬりゅづぶっ！

「んんんあああっ——っお尻いつ、痛いいつ——はひ…いやあああっ——っ！」

挿入される深度に比して、息が抜けるような圧迫感と痛みを感じた。

しかし男の力で腸の奥まで一気に犯されると、重たい充足感で、腰と全身の力がカクンと抜かれる。

「はああ…ああ…おくまでっ…おしりのっ、なかのおくうう——っ！」

媚肛から下腹部の奥までが、熱と堅さで満たされて、蕩けさせられてゆく。

サンドイッチで強姦される火憐の、脱力した両腕が、ツタから解放された。

「オイラも後でマンコっ。それまではとりあえず手でシゴけやつ！」

小さな掌を取られて、柔らかい指でガチガチな勃起を掴まされる。

長いイモみみたいな醜勃起は、乙女の柔らかい指で包まれた途端、更に熱と硬度を増した。未知の生物みたいに脈動する汚らわしい男性器。

なのに抱かされた女の掌は、まるで奉仕するのが当然の如く、優しく拙い愛撫を施してしまう。

「オレはまず口を犯す！」

最初の穢れた口づけが、頭を過る。

「くちつ、イヤですつ——つんぶううつ！」

勝手な宣言をされて美顔を取られたら、直後に喉まで肉詰めにされた。穢れた男性器を含まれた途端、口内から鼻腔、脳内までもが、汚臭漬けにされて染められてゆく。

廃棄された脂みたいな、嘔吐感しか湧かない勃起の嗚咽臭。

なのに処女を犯されて絶頂を教えられた女の脳と子宮には、頂点へと導いてくれる絶対的な愛しい証としか、認識できなかつた。

恐怖する自尊心では今すぐにでも吐き出したいのに、女体は愛しい恋人のように迎え入れた。

どうしていいのか戸惑う無垢な唇は、ただ含まされた肉棒を、舌に載せられたのみ。望まない口内には、新しい唾液が溢れて溜まる。

処女の反応に焦れた男に黒髪の頭を両手で押さえられて、乱暴に前後させられた。

「もつとシツカリと吸いつけつ！ 舌も使ってジツクリと味わうんだよつ！」

女体は、命令された通りに奉仕を開始。唾液溢れる口粘膜を絞って吸い、濡れた熱い舌を肉棒に拙く這わす。

「んぶつ——んちゅううつ、あぶ、レロちゅつ」

性欲に捕らわれて怒る男の顔が、犯された乙女の無意識には心底恐ろしい。

鍛えた心は既に形もないほど萎縮をして、火憐はもう、強姦魔に言われるままに女体奉仕をするしかできなかつた。

それなのに、弄ばれる女体は陵辱の興奮に熱暴走をさせられてゆく。

勃起の反りに合わせて女腰が蠢き、両手が愛撫をして、果蜜も唾液も新たにヌツトリと溢れて、肉棒に纏いついていた。

強い性感で、意識が朦朧とする。女の鼓動が限界まで高まり、もうすぐ、もつと強い絶頂がもらえる。

「アアあつ、イイいいいっでしゅううつ、あふっ——んくっ、しきゅうもおヒリもつ——

また、カレンんつ——あつあつ、またっイきましゅううつ!!」

絶頂熱に灼かれながら、火憐の肉体も脳も無意識も、更なる強姦悦楽に焼き上げられてゆく。

膣壁と腸と掌と口、全ての女孔がキュウウツと締まる。

途端に、腸と子宮を犯す二人が、掌で愛撫奉仕を受ける男が、口粘膜を陵辱する強姦者が、欲求の頂点へと達した。

「子宮で受け取れえっ!」

——っつどぶぶユリユリユつ、びゅううううつ、ドぱりユびユるビゅつ、ブゅビゅどくりゅっ!

全ての柔女壺で射精が行われると、火憐の艶肢体の外も中も、穢れた白濁を纏わされて



溢れる。

美しい顔や脛から、汗の巨乳や谷間に垂れ伸びる白粘液。後孔と膣孔からも、新鮮な蜜と大量の粘樹液が混ざった和合液が、タツプリと溢れ出ていた。

しかしまだ、強姦は終わらない。

「今度は僕が、マンコに中出しっつ！」

「じゃあオイラはケツだっ！」

四人の強姦魔によつて新たに犯される陵辱現場が、更に別の陵辱者たちにも見つけれられてしまう。

「いたぞつ、女だあつ！」

「オレたちも犯らせろおつ！」

勃起を振るいながら、新たな陵辱者たちが、五人十人とやってきた。

まだ、犯される。

乙女の心が、完全絶望へと突き墮とされてゆく。

「またっ——また犯されっ——また、またカレンを犯してっ、イキますううううっ！」

もう火憐には、姦獣たちから逃れる事なんて、絶対になかなかつた。

前後の女孔と両手、脛だけでなく、深い谷間や細い背筋、艶めく黒髪にまで、牡たちの勃起を突き込まれ、擦りつけられ、奉仕を強いられる。

前後に抱かれて突き上げられる、強姦肢体。汗と大量の精液にまみれる白い肌。

「んんあつ……くはつ——ついやだつ——ついやああああつ！」

太い堅肉で往復されると、胎内そのものが蕩けるような、絶対の甘熱を上げさせられてゆく。

コブに覆われた勃起で子宮壁を叩かれると、心の底から幸せな充足感で、女体が歓喜をさせられる。

肉カリ部分を限界まで抜かれると、まるで自分の全てを奪われてしまうかのような、未知の空疎感で覆われてしまう。

犯される膣内は多数のコブで愛撫をされて、一度に多人数の勃起を抽送されているかのような、複雑で激しい性快感。

自尊心の柱は、ほんの一瞬の肉抽送だけで、再び粉碎されてしまった。

「ウッフッフ、さすがは処女マンコねえ。ウブで結構な締めつけじゃないのン！」

女体の本能か、強姦魔の肉棒に熱圧迫をされて馴らされながら、霧華の膣壁は男性への締めつけ奉仕を拙く開始。

微細な襞が重なる膣粘膜が、新しい蜜を纏って強姦肉を抱き締めて、リズムカルに抱擁していた。

「こんなのっ——はひっ、あくああああつ——こんなの違ふっ——あたひいっ——ひはああつ！」

少女の清潔な意識は、自身の肉体感覚を必死に否定したい。それなのに犯される女体は、

蕩けた女の吐息を隠す事もできない。

開脚の少女腰を男の両掌で強く抱かれ、より深く確実に、ペニスを姦入される。

「つああああつ——そんなにつ、入っちゃはつ！」

熱い亀頭で子宮壁を押されると、全身が脱力。裸の背中が水中で震えて、豊乳は水面でタプタプと弾んだ。

細いウエストは柔らかくしなり、大きなヒップは前後させられて波を立たせる。子宮を深く肉責めされるたびに、胎内が熱い飢餓感で灼かれてゆく。

下腹部全体から背筋、脳裏までもが、知らない女の欲求で狂おしいまでに責め立てられる。

溺れないように、誰かが頭を支えてくれていた。

それは親切心などではなく、犯される媚顔をカメラに向けたまま固定する為だ。

「ひいつ、ひいいいつ——おなががつ、ああついよううつ——つからも蕩けつ——燃へちやうう、からあああつ！」

上気するツルツルの頬に、心の悲しみと女体の歓喜で涙が溢れる。強気な抵抗が、快感責めで惨めにねじ伏せられてゆく。

エモノの媚顔に、歪んだオネエが更に興奮。

「かわい〜い顔だわあ、もつと勃起しちやうう！」

レイプの辱棒が太さと熱を増すと、強姦魔は抽送のピッチを上げた。

——つづぶづぶちゅつぷつぷつ、ヂゆるユぬプツつつぶヂゅぶツぶつちゅつ！

全力で膣壁を叩かれ続ける、連続完全強姦。

子宮口を通り抜けるたびに、突き当たりの柔壁を肉ノックされるたびに、少女の女体が強姦の快楽へと躡けられてしまう。

初めての男性が強姦魔であり、強姦こそが女体快感の根源だと、脳と肉体に刻み込まれてゆく。

「おっおなかあああああつ——あんんつ、ひいんんつ——ズンズンすごひいっ——あ、た、ひいひいひいひいっ！」

子宮から背筋、全身から脳細胞へと、強くて鋭い性感だけで連続姦通され続ける。

力ないはずの背筋が痺れて反らされて、引き締まった下腹部と一緒に丸いヒップも飢餓感で痙攣。

きめ細かな肌は紅葉に染まり、上下する巨乳は水と汗をツルりと流す。先端の媚突も硬化して快感を見せつけて、艶々リップは無意識の笑みさえ浮かべていた。

もうあたしの身体は、あたしのモノじゃない。

そんな無意識までもが当然の事のように、脳裏で勝手に焼きつけられてしまう。

全身の神経が男の強姦抽送に躡けられて、快感をくれるという認識を確実にさせられた。犯され膣壁は新たな蜜を溢れさせ続け、勃起に密着をして、気持ちよくなって頂こうと

褻撫で奉仕。

理性は完全に肉棒に押しつぶされて、自尊心の柱も更なる肉圧壊をさせられてゆく。

もう身体も脳も、オナニーでは決して得られないであろう肉棒での絶頂しか、望めなくされていた。

「もうへんんっ——あたま、カラにいつ——はううあああつ——あたひ、バカにつちやふううっ！」

犯される女体が、未知の世界へと高揚させられてゆく。

全ての音も目の前のスキンヘッド強姦魔も、遠くだけど限りなく愛おしい光景のように錯覚。

強姦現場を見ている男たちも、股間の逸物を更に堅くさせて、液漏れを見せていた。

子宮の飢餓感が膨張させられると、目の前が眩く輝いて、もうすぐ嬉しい瞬間だと女体が確信する。

拙い締めつけは、強姦の喜びに直結したらしい。

二・三九番がレイプの勃起をギリギリまで抜いた次の瞬間、霧華は全力の腰打ちで、子宮壁を正面突きにされた。

「もうイクわあんっ、アンタもイクって言いなさいいっ！」

——つつっんんっ！

「っ——っ！」

全力肉詰めをされた瞬間、子宮から背筋、脳の天辺までの女体全てを、初めての絶頂感

だけで突き抜けられた。

犯された少女は、頂点を彷徨わされながらも無意識に、命じられた言葉を告げていた。

「いイイくふうううううつ——つあつ、いあんつ——つあたひいくつ——ヒクよおおおとおおおおおおおおおおおつ!!」

身体中の筋肉が硬直をして、背筋を反らして豊乳を突き出す。柔らかか双乳が微細に震えて、媚突は更に赤く硬化。

ウエストも下腹部もピククつと痙攣をして、開脚された内股もピンツと張った。

水中の裸尻も柔らかく震えて、肛門と膣孔がキュウウツと締まる。肉芽も包皮から剥き身を晒して震え、牡たちやカメラに視姦され続けていた。

強姦絶頂を彷徨う蕩ける瞳の霧華に、更に残酷な中出し宣言。

「大半の女が孕んだスペルマよんつ、これで完全強姦完了。ああんつ♥」

女言葉と同時に、再抽送での射精をされた。

粘性と生命力の強い濃い精液が、突き上げの勢いを乗せて、強く感実に子宮壁へと吐きつけられる。

——つぷピユウウウウウウウツツ、ぬぶドビユルルルルツツ、づぶピユクルユルユルユルユルユツツ!

「はひつ——なかやらあヒいいいっ——ついきながら中ラシいっ……ズンズンピユウウつてつ……またイツちやふつ……あか、あかちゃんつ、れきちやうのにひいいいいいいい

いい…っ！」

一突きごとの強い放出で、子宮を連続で叩かれて、より高い絶頂へと突き上げられる。口から溢れる妊娠の恐怖さえ、もはや悦楽の吐息でしかない。

霧華の聖宮は、強姦魔の粘液に隙間なく満たされて、更に鈴口でグリグリと、精液を子宮壁に擦りつけられ続けた。

連続突きされる腰は激しい水しぶきを上げて、少女の裸体が濡れてキラキラと光る。

少女格闘家にタツプりと子宮出しをした連続強姦魔が勃起を抜く。と、いまだ赤い膣壁からは、蜜と精液の混ざった和合液が糸を引く。

粘性の高い強姦精液は、まるで濃く溶いた片栗粉の如く、少女孔から溢れてもこぼれなかつた。

女体は絶頂から下りられなくされていて、砕かれた自尊心の柱と一緒に、いまだ悦楽の波に揺られている。

犯し終えたイレズミのオネエ男は、立ち上がるとエモノにはもう、なんの興味も示さなかつた。

周りの男たちを眺め回して、軽く告げる。

「さて、アタシは強姦を楽しんで…賞金もらってここからオサラバ。エッヘッヘ」
スキンヘッドの男が、内股歩きで手近な岩に腰かける。途端に、それまで眺めているだけだった牡たちが、一斉にレイプを姦行してきた。

「ボクもつ、まんこするうっ！」

「金だあつ、犯して金もらつて、出るんだあつ！」

湖の畔で、後ろ手に縛られたまま、瘦せた青年にヒザ立ち姿勢で強姦をされる。

「ボ、ボクつ、霧華ちゃんの、大ファンなんだよおっ！　せセックスできてつ、う嬉しいなああつ！」

標準の太さだけど長い勃起で突き上げられると、体重も手伝つて子宮壁を突き上げられた。

「っひひああああつ——またあたひつ——おかされてるうううっ！」

言葉にしながら、子宮は簡単に飢餓感を溢れさせられ、更なる絶頂をねだつてしまう。

より狂おしい子宮快感に、背筋から脳までを灼かれると、もう肉体は霧華自身のモノではなく、自ら強姦魔たちの所有物へと転落していった。

処女を喪失したばかりの新鮮膣壁は、新たな蜜で愛しくキツく、ハンターの勃起を抱き締めて歓迎。

「うおおつ——すげえ締めつけマンコおおつ！」

抽送が始められる直前、背後からヒップを掴まれる。ヒザ立ちでお尻を突き出すような姿勢にされると、太った中年の太いペニスが後孔に充てられた。

「わ、ワタシがお尻を、もらつてあげよおねえ」

命じられるままに、身体が勝手に肛門の力を緩めると、骨盤を抱かれて一気に姦入。

内臓から息が抜かれるような圧迫感に、電撃責めでの窒息を思い出して恐怖する。なのに、ペニスのくれる快感を躡けられた肉体は一瞬で、恐怖心を肉感に擦り潰されていた。

「つんひあああああつ——っ息い……おひりも、ドキドキ、ひちやうのっ！」

腸まで肉棒責めにされると、また知らない性感を教え込まれる。下向き豊乳が、たぶんと弾んだ。

お尻という箇所だから嫌悪感が湧くの、それ故に更に強く抗えない、背徳的で惨めな被虐性感。

双乳を犯されただけで、下半身から全身にまで、逃れられない悦楽の脱力感に染められてしまった。

自己満足だけの抽送が始められると、それなのに女の肉体は、貪欲に快感を拾い始める。——つつプヂユるユぶつ、ずプぬルゆチュつ、ぬぶヅぶヌぶつ！

「はひっ、はひっ、あはうっ——またいつちやふううっ——おかされてっ——あつくてはげしくてっ、いつちやうよううっ！」

前後から別々のタイミングで肉突きをされると、それぞれ違った肉快感を女体は感じた。腸の奥まで犯されると、少女腰の全体が碎かれるような、強烈に痺れる性感。子宮を叩かれるほど詰められると、脳までもが快感飽和をして、目の前が虹色に輝いて蕩ける。

下と背後からのケモノ姿勢レイプで肢体が揺すられ、質量を増した双乳が激しく楕円を

描く。

「お、お尻もキツクシメるんだねえっ！」

膣壁姦通の直後に犯された為か、腸粘膜は本来の排泄機能よりも、犯される奉仕の才能を開花させられていった。

強姦で揺れる柔らかか豊乳を、当然の如く牡たちが見逃すハズもない。

上半身を横に向けられると、赤くて長い肉棒の肥えたロン毛の青年に、胸の谷間を犯された。

「でかい乳だぜっ！ しかもムッチムチだっ！」

「っあうっ！」

谷間を制圧されると、薄い皮膚の下で心臓がドキユツと跳ねる。

二十センチを越えるペニスには、柔乳の谷間でも埋めきれない。ロン毛の青年は格闘少女の鉢巻きを掴むと、艶めく臀をも犯してきた。

「パイズリフェラだあつ、夢だったああつ！」

口内が犯されると、異性独特の強い精臭にむせ返りそうになる。ガマン液の匂いだけでなく、ニガイ味まで舌になすりつけられた。

「んぐくっ——んむっ、んんっ！」

臭い。いやだ——。

理性が上げた悲鳴さえも、犯された女体による強い官能で、踏みにじられて消失させら

れてゆく。

「しっかりと吸ってえつ、裏も表も舐めろおっ！」

「んちゅううっ——あい…ちゅっ、ぷちゅうう」

男の命ずるままに、強姦魔のペニスを吸って内頬で撫でて、舌で愛撫。

こんな…やなの…。

唾液をタツプリと纏った熱い濡れ舌で、臭い肉棒を舐め奉仕していると、女の脳が恥辱的で被虐的な墮落の快感で、一方的に躡けられてゆく。

強姦魔たちに犯されながら、霧華はいつしか、ウツトリと瞼を閉じる。

穢れたレイプ魔たちによって、守るべき女の肉肛の全てを支配されるという、淫墮で惨めで絶対的な自己破壊の底なし官能へと、沈められていった。

「んちゅっ、ペろっ——つしたからズンズンんっ——んああっ——もうすぐっ、このままおかされてっ、またイっちゃううっ！」

前後を犯す肉棒の突き上げに、女体は無意識にタイミングを合わせて肢体を上下。

「見ろよっ、尻を振り始めやがったぜっ！ このエロ娘がっ！」

もう罵りの言葉にさえも、子宮が痺れた。三つの媚肛で強姦魔を受け入れながらも、溢れる蜜と性熱量と、締めつけの強さが増してゆく。

格闘少女の身体も意識も、犯されながら更なる絶頂だけしか望めなくされていた。

「気分を出してきたねっ、コッチもいいよっ！」

レイプ魔たちが、射精に向かつて腰突きが強さと速さを上げてゆく。

——つぷつぷちユリユつ、又るりユる又るちゅぷつ、くぷ又ぷレロちゅぷッ！

谷間と三孔を同時に強く肉責めされる霧華は、再び全ての音が遠退いて、臉の奥が眩く輝く。

「あああああつ、あたひつ、んぷつ——んぱつ、あたひまたあつ、おかされていくうつ

——んくんつ——いいいいつ——ゴーカーン中ラシれつ——またイクよおとおおつ！」

膣壁と腸が無意識にキツく締まって、口内を強く吸うと、男たちも爆ぜた。

「ボクも出すぞつ、ボクのチンポでイけえつ！」

「わつ、ワタシもおつ！」

それぞれ言い放つと、一際強く勃起突きされた。

——つつづぶくちゅつつ！

姦男たちの肉詰めで、少女はまた、更に深く高い絶頂へと突き上げられる。

「ひやあああああつ——つまたイクうつ——んぶんつ、んんつ——つんぱつ、あたしきもち

ちいいのつ——つおかされていくの、いいよううつつ!!」

恥知らずな悦楽を口にしながら、全身を痙攣させる霧華。

少女の口と腸内と子宮壁では、強姦魔たちが穢れた快感粘液を放出させた。

——つびゆるぢゆるユルびゆるユウウツ、どぶびゅくりユるルルつ、びゅくくくつ！

愛顔の鼻筋や頬、寄せられた豊乳の谷間が、白濁をパツクされる。膣孔と後孔からも、



ケダモノたちの精液がタツプリと溢れ出た。

強姦魔たちが勃起を抜く。

三孔から精液溢れる少女の視界には、力強く欲求を見せつけ、突きつけられるペニスの群れ。

満たされたはずの子宮は、それだけで新たに、強い飢餓感で燃焼させられてしまう。

強姦魔の豪肉に囲まれた霧華は、教えられたばかりの単語を無意識に咬いていた。

「ああ……ごうかん……ち……んぽお……」

全身の内外を白濁塗りにされた、格闘少女。

女体の本能。濡れる瞳で見つめてしまうと、牡たちは更に欲情を暴走させてきた。

霧華の子宮を味わいたい強姦男たちは、まだ五人以上いて、更に園内を数十人と走ってくる。

あたし……まだ……犯される……。

閉じゆく初な膣媚孔が、暴走族風な青年の勃起を突きつけられる。

「オレつちも犯るぞっ！ オラあ、何が欲しいか言ってみろやっ！」

羞恥した途端、粘膜を肉擦りされて、少女の脣は恥ずかしい単語を叫んでいた。

「あくんっ——お……ちんっ——あひゃあああっ——おちんぽっ、オチンポ下さひいいいっ！」

「ケッケケケ、無敗の格闘少女とかも、オレ様の勃起に屈服かああっ!!」

格闘少女である霧華が最も軽蔑する暴走族に、笑われながら、ズプッと最奥まで肉強姦された。

女格闘家として、人生最大の屈辱。なのに。

「つはひいあああああつ——はいいつ、霧華つ——キリカわはつ——つおチンポ様にひいひいひいひいひい——敗北うううううううつ！」

強姦されながら、意志の光を失った瞳が肉官能に蕩けきっていた。

そして日が傾いた頃、数十人に犯され続けて精液まみれとなった少女は、黒服たちに回収された。

「さて、お仲間とご対面だ。ククク」

なかま……………カレンさん——。

茫然自失の霧華は、白濁の糸を引く裸身のまま黒革の紐で両掌を背後に縛り直されて、どこかへと連れ去られた——。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
ドリームマガジン
ED DREAM MAGAZINE

公開調教

偶数月
17日発売

20

二次元 ドリームマガジン ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

COMIC UNREAL

08 2013
180yen

Hisasi

気持ちいい天罰
受けてみる?

奇数月
12日発売

13

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

MEGAMI CRISIS Vol.13

メガミ
グライセス

TS魔法少女の情と共に震る!

マブカレ魔法少女!

chaccu

原作:コトキエ

奇数月
下旬発売

コインが
まくるアンソロジー!

今号でラスト!
今秋リニエール&
アルド

詳しくは
本誌の中身も
チェックしてね!

COMIC UNREAL UNREAL

メガミ グライセス

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。